

# 西真寺通信

令和三年夏号発行 西真寺

住職のつぶやき

人は死んだら、七日ごとに生前の行いについて審理され、三十五日には閻魔大王から、地獄か極楽行きの裁きを下される話は、本当なのででしょうか？

どんな人でも生前の行いには影があり、仏さまのような行いを実行された方は居ないと思います。だからこそ裁きを受けます。だからこそ裁きを受けます。だからこそ裁きを受けます。前に、生きている人間が亡き人の為に追善供養としてお経を上げ、功德を積むのだと大半の方は思っておられます。しかし、この追善供養の考え方の元は、中国の道教の思想です。

中国で生まれた『預修十王生

七経』(偽経)では、道教における冥府の王である泰山府とインドの死者の国の王であった閻魔が冥府で人の死後七日ごとに審理するというものです。

中国化した仏教に道教が混じり、日本にこの十王信仰が入り、十王それぞれが、権化した仏さまとして十王仏になり、三仏を加えたのが十三仏信仰です。日本では十三世紀に編纂された『地藏菩薩発心因縁十王経』となり、民族化された思想が、追善供養となりました。

平安時代では、天皇や貴族の依頼を受けた僧侶が、葬儀や追善供養を執り行いました。同時期の庶民には供養どころか、葬

儀も一般化されずに、河原や山のかもとに病人の状態から捨てられ、死体となり遺棄されたのです。平安時代の貴族たちは、穢れを忌む蝕穢思想(しよくえしそう)に捉われ、市中にある死骸を怖れたからです。

戦国時代の頃、疫病がはやり、飢餓と騒乱の中、京都の鴨川では、様々な死体が捨てられ、死体の山となって鴨川の流水をせき止めたといわれています。そこで看取り供養したのが、空也などの「念仏聖」です。

人殺しや悪行を繰り返し、その怨念からの救いを求める貴族や武士達は、死後の供養である追善供養を僧侶に頼みました。

一方の民衆は、生前の功德が念仏であり、今生の苦しみからの解放である往生を願いました。民衆が念仏に傾倒したのは、必

然の流れでありました。これを厭離穢土(えんりえど)といいます。

生きているこの穢土(娑婆)で、家族でさえ救えない私達人間が、死後の世界に地獄に往く故人を救えるはずがありません。

善根功德は、自分で積むもので、他者に振り向けるものではなく、まして亡くなった人に向けて積む行ではありません。

そもそも亡き人は、自分が供養される事を望んでいるのでしょうか。すでに亡き人は、阿弥陀仏のもとで救われる道にたどりついています。亡き人は仏の世界から生きている我々を逆に救いたいと願い、念仏とともに救われる道をお経を通じて、我々に問いかけているのです。この亡き人である諸仏と出遭い続ける仏縁が、葬儀であり法事です。

南無阿弥陀仏

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」5  
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

### 3. 戦う国家と宗教教団の関係 Ⅱ 国家神道について

明治の帝国憲法と教育勅語により、万世一系・神聖不可侵の天皇が日本に君臨し、天応の君徳が天壤無窮てんじょうむきゆうに四海を覆い

臣民しんみん（注）も天皇の事業を協賛し、義は君臣であれども情は親子のごとく、忠孝一致によって国家の進運を扶持する。天皇が永久に統治権を総攬そうらんするものとしてまた、天皇と国民との強い絆があるとして、制度化が整備され、国民に畏怖されたのです。  
（注）儒学では、臣民Ⅱ君主国において君主に支配される人民を指す。臣は朝廷に仕える政府高官、民は、朝廷に統治される民衆を意味しました。

ノーベル文学賞を受賞したカミュは『ペスト』の中で、「人間は理念によって人を殺す」と語っています。カミュの思想によれば、「不条理」という暴力は、人間と世界を結ぶ絆と唯一対峙し、反抗する態度が連帯を生むとして、神に依らない生の意味を探索しました。カミュにとつて「理念」や「神」は否定しないが、一貫して拒否する対象であったのです。

\* 国家神道のまとめⅡ 為政者（いせいしゃ）が神道の持つ教義の曖昧さを利用して、理念により戦い、人を殺す側を正当化する（国家理念こそが不条理なる世界を構築する）

人間の持つ支配欲と政治権力について、信楽俊麿は次のように述べています。

政治権力というものは、いつの時代にあっても、自らの権力を一層強固にするため、つ

ねに現世的な権威のほかには**神聖的な権威**を身につけようとすし、またその支配をより徹底させるために、民衆の精神にまで立ち入って、**その内的生活までも支配しようと画策する**ものです。

歴史上、宗教の教団が権力者と合一した結果の戦争であることとを学んだのは、明白な真実であるからです。それは憲法が保障する「政教分離」の原則に位置付けられています。

また、広島で被爆した信楽は、当時の本願寺教団について「開祖親鸞聖人の根本意識そむに叛いて、いたずらに時の政治権力に迎合癒着し、その体制に埋没して自己を喪失していたという現実があります」と述べています。

歴史上戦争に反対した大谷派僧侶 竹中彰元（しょうげん）

は、政府の言いなりになり、戦争に加担した本願寺教団と国家に対し、「戦争は最大の罪悪である」と主張した僧侶です。布教師資格をなく奪された竹中は生涯に渡り、教団に仕えず、国に仕えず、鬼神に仕えず、み教えと共に生きたのです。また、本願寺派の島地黙雷は、「凡そ政教は判然相分るる者なれば、僧家あいわかたの事、政家固もとより問うべきに非ず云々」と明治政府の政教一致の国家を批判しています。

以上の3人の僧侶は、教団が戦争に賛成した時代においても、親鸞のみ教えと意識も理解していたのです。親鸞上人が権力に染まらず、相対的に国家を観ていた唯一無二の仏教者たる由縁です。私たちは、七百年後の近代人に影響を与えているこの「政教一致」の意味を聴く必要があるのです。（次号に続く）

## 死刑制度と悪を考える③ 親鸞の悪の捉え方

### 1. 死刑制度の現状

加害者の死を望み、処刑されることで被害者の遺族は生きて往けるのでしょうか。生涯を通じて、一生をかけて罪を償い、謝り続ける加害者の存在があればこそ、被害者遺族の感情は変化し、たとえ赦すことは出来なくても、苦しみを抱えながらも開かれた道へと歩んで往けると考えます。

そして、加害者と被害者遺族の関りを通じて互いに成長する過程が必要であるとすれば、恨みの人生を生きるよりも、この過程こそが応報感情より、当事者に必要な過程になるのではないのでしょうか。それは亡き被害者が、遺族に対して本当に望み、願う生き方であると私は信じています。それは、亡き人は遺族の幸せを願うはずだからです。

本当の賢者は、自分の内なる愚かさに気付いた人のことであり、ウエルチさんのように自己の内にある「憎悪」や「復讐心」が被害者と同じ感情であることに気づいた人のことです。自分の善人さに気付く賢者とは、善人の仮面を被った偽善者のことです。

賢者とは、正義に生きるよりも自己の無明さに明るい人間を指すのです。

自分も悪人を裁く側に居れば、自分は常に善人でいられるのですが、悪人に共感する側、裁かれる側には立ちたくないのは当然です。

人の苦しみや痛みは理解しているが、常に被害者側の立場にいたい。殺す側の苦しみや心の痛みなどどうでも良いのだ。このような無意識の世界に押し込められた想いや、見て見ぬふ

りをしてきた我々の無意識なる傾向が、殺す側の人間を生み出したのです。見捨てられることで、殺す側の論理を育てる肥料と成って、悪なる世界観が肥大化して往くのだと思います。

日本の死刑執行は、死刑囚に対する事前通知は無く、執行の日、執行の一時間前に告知されま

す。そして、家族に対しては執行後に執行事実を知らされるとい

うものです。

日本が国際人権規約委員会よりその非人道性について勧告を受けています。最後に会いたい人にも会えないという扱いは、人として捨てられたも同然の扱いではないのでしょうか。

社会から見捨てられる人間のことなど知る必要が無いというならば、人間をごみとして排除する世界を肯定する国家制度に対し問題は無い為、必然的に国家に随順する立場が生まれます。

社会から家族から見捨てられた人々に対して、絶対に人を殺さない殺させない社会にするこ

とへの手立ては、死刑制度では決して生まれません。

社会に見捨てられた人間を無視し、自分は、絶対に殺人を犯さない人間だと信じているからこそ、死刑制度に賛成なのではないのでしょうか。

処刑される側には無縁であるという理性の意思表示が情動となり、心の渦を生み、その渦が無批判に国家体制に準ずる根本原理となるのでありましょう。

しかし、人は条件がそろえばいつでもどこでも殺人者に成り、鬼にもなり得ます。

いつその理性の根本原理が覆るか分からないのが人間の本質なのではないのでしょうか。

(次号に続く)

## 日本式葬儀について考える

## ■位牌について

浄土真宗では、葬儀で白木の位牌は使用してはいますが、仏壇では使わないのはなぜでしょうか。

実は位牌とは、中国の古代後漢代に使われ始められた儒教の葬礼において用いられたもので、インド仏教とは無縁の思想に基づいた産物であったからです。

儒教では、位牌は木主や神主と呼ばれ、死者の官職名や姓名諡（おくりな・天皇や高官などに死後付けられた名前）などを霊に託す風習をもとにする、先祖祠堂（ほころのおどう）に安置する霊牌を指します。

中国では紀元前から既に姓を持ち、先祖崇拜が中心であった為、宋の時代に中国から渡来した僧侶が布教のために「位牌」を用いて、

姓を持ちはじめた当時の武家社会に浸透させたと言われています。（この時代に庶民は、姓を持っていません）

中国で始まった禅宗は、儒教の影響を強く反映させていたことから、現在でも禅宗が中心に、位牌を葬儀や仏壇でも使用していると考えられます。

また、儀礼を重んじる中国仏教が禅宗の儀礼法を発展させ、儒教と道教の影響のもとで日本の葬儀が広く伝わった為、現在の日本の葬儀においても位牌を使用しているに過ぎません。

位牌は、儒教化した仏教の産物なのです。

一方の浄土真宗は、中国仏教の儀礼中心よりも信仰心を中心とした布教活動から、広まった教えです。中国の縦社会の思想よりもインドの横社会、すな

わちインド仏教の原点である横に超えて往く浄土教、釈尊の原点に戻ることがあったからです。

インド社会が、バラモン教という支配階級を持つ時代から、平等なる仏教に変化し、再び支配階級による、儀礼化、神格化されたヒンドゥー教に塗り替えられた歴史がそのことを証明しています。

日本では、禅宗の僧侶たちが広めた位牌を中心にした葬儀の儀礼化が広まる一方で、浄土真宗の門徒が信心の証として法名を頂き、拡大していった背景は、同じ時代の対照的な過程であります。

葬儀のみ位牌を取り入れた門徒は「位牌」をあくまでも仮のものとした理由があったのです。

死後の権威を象徴する儒教式「位牌」より、平等性や信仰心を重んじた門徒の信心における純粹な宗教心が伝わる所以です。

## 一月の伝道掲示板

「お釈迦様みたいにはなれないやっぱり私は南無阿弥陀仏」

年末の紅白歌合戦を観ていたら、坂本冬美が、桑田佳祐の作詞作曲の「ブツダのように私は死んだ」を歌っていました。

自分を捨てた男に対する恨み節のような内容で、歌詞の途中に「お釈迦様に代わって殴るよ」「お釈迦さまみたいにはなれないやっぱり私は男を…」の2か所だけお釈迦さまが出てくるのですが、「やっぱり私は…」とは煩惱だらけで、変わらない自分に対する気づきでしょうか？

そこで私の場合を考え、右に挙げた言葉になりました。どんなにあげてもお釈迦様に近づけずにいる僧侶としての私。そんな私でも、いつも阿弥陀さまがついていると思うと、安心して生きることができるようです。

南無阿弥陀仏